

<前回>：後期オリエンテーション

後期：自然神学の新しい可能性

1. 言語・解釈学から聖書へ

2. 聖書学の諸動向

2-1：イエス研究とクロッサン 12/3, 10 2-2：パウロ研究から 12/17

3. 聖書学から政治思想へ

3-1：聖書と政治思想 1/7 3-2：アガンベン 1/14 3-3：ジジェク 1/21

Exkurs

- ・アガペーとエロス
- ・脳科学からキリスト教思想へ

<前提>リユースー

A. フェミニスト神学の誕生

- 1960 年代以前のフェミニズムが主として男性中心の社会システムにおける女性の権利獲得を目指していたのに対して、この 30 年間のフェミニズムは社会システム全般に対する異議の申し立てを超えて、それを支え正当化している価値観や世界像の批判へと進み、文化や意識のレベルでの変革を追求するに至っている（大越, 1997）。
- キリスト教における女性思想の系譜＋フェミニズムの問題提起
→ フェミニスト神学
- 争点としての聖書解釈の問題（フェミニスト的聖書解釈）
- 対照的で代表的な論者として次の二人に注目
デイリ (Mary Daly, 1928-2010) とリユースー (Rosemary Radford Ruether, 1936-)
アメリカ、白人、リベラルなキリスト教という文脈、そしてこの文脈を超えた展開。

B. デイリとリユースー

- 神が男性イメージ（家父長的で王権的）によってのみ語られている点に関して。
デイリ (Daly, 1973) は、イエスは男性であり、それゆえ女性の生き方の規範になり得ないと主張する——イエスは過去の人物であり、現代人の規範にはなり得ない、そもそも人間は自分自身の人生を生きねばならないのであって、他人を規範とすることはできない——。
- リユースー：デイリの伝統的キリスト論の徹底的な否定論に対して、フェミニスト神学に至る思想系譜をキリスト教思想の伝統自体の中に再発見し、その過程でキリスト論の再構築を試みている。
- リユースー (Ruether, 1983, 116-138)。古典的キリスト論（カルケドン公会議の）は、贖われたメシア的王の思想と神と人間を結びつける神的知恵の思想とを基盤に成立したが、その際に男性象徴（男性としてのイエス）が選ばれた。

↓

イエスという歴史的な人物が男性であったことと、神の子あるいはロゴスが男性であることとの間に必然的かつ存在論的な関係があるという考えが派生

↓

女性原理が神象徴の中から排除される。

- イエスの宗教運動に内包されたフェミニスト的キリスト論（女性の経験と相関しうるキリスト論）。リユースーのフェミニスト神学の基礎論の一つは聖書学的知見。

フェミニスト神学の聖書解釈は、まずイエスの宗教運動の中に男性優位イデオロギーとは異質な主張を再発見し、続いて正統キリスト論によって抑圧されてはいるが様々な仕方生き続けてきた他のキリスト論を掘り起こす作業を行う。

↓

イエスの宣教した神の国は国家主義的でも彼岸的でもない。神の国は支配と被支配、抑圧と服従の構造を乗り越えるものとしてこの地上に到来する。イエスはメシア的預言者を王的にではなく、僕として象徴化する。イエスは当時のユダヤ社会において制度化されて

いた様々な差別抑圧構造と戦わざるを得なかった。

12. 正典化のプロセス

13. リューサーが注目するのは、神秘主義の伝統に見出される両性具有的キリスト論と、預言者的千年王国論的運動に見られる霊的キリスト論。

14. 「支配-従属」のモデルに規定されないキリスト論（フェミニスト的キリスト論）の再構築。

「解放者として語るイエスの能力は、男であることに存するのではなく、この支配の制度を批判し、彼自身の人格の中に、奉仕と互いの法的権限を認め合う新しい人間性を具現しようとした、その事実に存するのである。……神学的に言って、イエスが男であることは、究極的な重要性を持たないと言えるかもしれない。それは、家父長的特権を認める枠組みの中で、社会的象徴的意味を持つだけである。この意味で、解放された人間の代表であり、解放を促す神の言葉であるキリストとしてのイエスは、家父長制のケノーシスと新しい人間性の宣言を顕わにする。この新しい人間性は、ヒエラルキーに基づく社会的地位の特権を捨て、低き者のために語る生き方を通して宣言されるのである。」(ibid.,137)

15. デイリ：男性と女性の非和解的な敵対関係を前提とした「女性解放論」

リューサー：「女と男からなる新しい人間性」の実現という意味における「人間解放の神学」

C. リューサーのエコ・フェミニスト神学

Rosemary Radford Ruether, "Ecofeminism: The Challenge to Theology," in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press, 2000. pp. 97-112.

リューサー「エコフェミニズム——神学への挑戦」

1. 問題提起：挑戦 (97-98)

エコフェミニズムは、古典的なキリスト教神学と、家父長的な世界観によって形成されたすべての古典的宗教とに対する徹底した挑戦であるが、この論文では、古代の中近東とギリシャローマ世界の世界観に根差したキリスト教に焦点が絞られる。

エコフェミニズムは女性への支配と自然への支配の相互連関を吟味し、それから解放を目指しているが、性差別と環境的搾取の間に見られるこの関係性には、文化—象徴的レベルと社会経済的レベルの二つのレベルが存在している。前者は後者を反映し承認するイデオロギー的な上部構造と考えられる。つまり、後者は、事物の自然本性あるいは神（神々）の意志との関連で正当化される。女性、奴隷、動物、土地への男性の支配関係は財産・所有として法的に指定され、この法は神（神々）によって与えられるという連関である。

2. 支配関係の歴史的考察——神話からアウグスティヌス、近代まで (98-106)

・初期のキリスト教的運動の中には、あらゆる支配的關係からのキリスト教における解放を示唆するものが見られる。パウロのガラテヤの信徒への手紙3：28。原初の平等性。

しかし、家父長的な家族と政治秩序への制度化において、この徹底的な平等性は急速に抑圧されることになった。パウロ以降の動向。

・アウグスティヌスの女性従属論

女性的なものは劣った身体的な本性。女性が神の像において存在するのは、男性的なものと結びつくことによるのみ可能。エバの反逆。そこには、脆弱性からの逃亡の投影が見られる。

3) フェミニスト神学への流れ

3. エコフェミニスト的なキリスト教伝統の再構築にむけて (106-110)

1) 自己論（人間理解）

・プラトニズム的な心身二元論への挑戦

人間は長い進化プロセスの子孫であり、多様な有機体の諸レベルにおける物質—エネルギーの動態の連続性（無機的エネルギーから生命、生命の自覚、有機体における反省的な自己意識へ）に基づいている。

キリスト思想の新しい展開——自然・環境・経済・聖書（1）——

ホモサピエンスの出現と支配・搾取。スチュワードシップは、最初の命令ではなく、支配的男性の事後的な努力（乱用を正だし、よりよい支配者となる）。反省的自己意識とは分離可能な存在論的実体ではなく、脳—身体に不可欠でそれとともに死ぬ我々の内面性の経験である。不死性は、個的意識の保持にあるのではなく、終わることなく循環する物質—エネルギーの奇蹟・神秘にある。

2) 悪と救済

悪の存在しない原初のパラダイスと、悪と死が克服される未来のパラダイスという前提を放棄すること。

・悪は常に我々と共にある。

罪は、可死性、有限性、脆弱性から逃避しようとする努力のうちにある。逃避の欲望は、他の人間や土地や動物を独占しようとする力ある男によって有害な形が与えられる。非脆弱さ確保しようとする努力が他者や地球を犠牲にして力を蓄えようする際限のないプロセスを強いる。ターゲットしての女性。

女性・身体・地球の支配とそれからの逃亡＝自らの否定された有限性の克服とそれからの逃亡

これが、歪曲のシステムを生み出す。支配と歪みのシステムが罪である。

↓

救済とは、歪みのシステムを廃棄することによって、そうすることによって、相互に命を与え合う共同性を期待できるようになる。

誤った逃亡主義から解放された終末的希望のヴィジョン
様々な悲劇の只中で豊かな喜びを共に享受すること、限界や過ちや事故をも等しく分かち合うこと。

罪（他者を犠牲にすること）とハン（Han、犠牲にされた者の痛み）に根差した逃亡主義的自己と救済史を破棄すること。

・神論：

・キリスト論：

英雄的戦士というメシア神話の問題性。復讐の乾きと結びつく。破壊の循環を再生産し、新しい犠牲を生み出す。

イエスは、それとは異なった預言者の人物であり、破壊の循環を突破しようとする。

メシア神話を転換しなければならない。平等な者の共同体の再発見への反メシア的な呼び出し。キリストとしてのイエスは、聖なる知恵を具現している。

Exkurs

脳科学からキリスト教思想へ

- 1 はじめに——「キリスト教と科学」関係論の現在
- 2 脳科学の進展と社会脳
- 3 社会脳とキリスト教思想
- 4 むすび

1 はじめに——「キリスト教と科学」関係論の現在

<関係史のアウトライン>

未分化／調和

／分離・分裂／対立／無関係／新たな関係へ

分化／区別（専門化）／緊張

古代

中世

近代初頭

啓蒙・19世紀 20世紀

1. 19世紀の自然神学：生命現象という最後の砦

自然神学（デザインからの神の存在論証）は、18世紀の啓蒙主義の登場にもかかわら

- ず、19世紀の前半までは（ウィリアム・ペイリー）十分に説得性を保持していた。
2. キリスト教的生命論：アリストテレスの生命論＋聖書の創造物語
 3. 進化論の衝撃：ダーウィンの進化論は、生命の環境への適応についても一突然変異と自然淘汰（偶然と必然）との相互作用一、神なしに説明する可能性を提示した。ペイリーに至る自然神学の伝統は一端大きな区切りに達した（＝終焉？）。現代宇宙論における「人間原理」をめぐる議論。
 4. 19世紀のダーウィンの進化論の登場→進化論論争、しかし、初期の論争は、科学も宗教がそれぞれの範囲を逸脱して行った感情的応答と言わねばならない。
 - ・19世紀の進化論は十分に科学的か？
イデオロギーとしての進化論、社会ダーウィニズム。
 - ・進化論は神の否定を帰結するとは限らない。第一次原因と第二次原因（直接的と間接的）の区別を導入すれば、神の摂理（第一次原因）と進化論（第二次原因の理論）とは、対立を回避できる。
 5. 対立図式の社会学的説明
ウィルバーフォース伝説（1860年）の流布や、ドレイパー（『宗教と科学の闘争史』1874年）、ホワイト（『科学と宗教との闘争』1896年）の著書の出版。「科学と宗教の対立図式」は1880年代以降の産物。19世紀後半に、自立した専門家集団として登場しつつあった専門科学者の集団とそれまで生物学をリードしてきた聖職者兼科学者の集団との間の、つまり二つの知的エリート集団間の闘争。
 6. 「脳・心・宗教」、あるいは脳神経科学とキリスト教思想という問題連関を理解する上で参照すべきは、19世紀の宗教批判、特に19世紀後半以降の進化論論争とそこから得られる教訓であろう。
進化論者と創造論者という両陣営の原理主義的論調。ドーキンス、マクグラスの場合。

2 脳科学の進展と社会脳

（1）脳科学と宗教—1980年代～2000年頃—

1. 1980年代以降、脳神経科学の進展（特に、fMRI（機能的磁気共鳴画像）などによる脳活動の画像化技術の開発） → 脳神経宗教学。
2. リタ・カーターによる簡潔なまとめを参照しつつ、ジョン・ヒックが2006年に出版された著書で的確な論述を行っている（邦訳：ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うのか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館）。
 - 「1 「パーシングのヘルメット」によるてんかん発作と前頭葉刺激は宗教的幻想の原因となる。
 - 2 向精神薬はさまざまなかたちの宗教体験をもたらす。
 - 3 「純粹意識」、空、無、空性（シューニヤター）の意識は、知覚から取り込むすべての入力を切断したあとにも残存する意識が原因で生じる。
 - 4 すべての実在との一体感は、個人の身体的な境界意識を遮断することで生じる。
 - 5 神の存在あるいはそのほかの超自然的な存在の感覚は、「自我システム」を二分して一方が他方を別の実体と見るときに生じる。」
3. 自然主義の立場：様々なタイプの宗教経験が脳内の自然のプロセスによって生じる。宗教経験とは「もっぱら妄想であると主張する重大な論拠」（ヒック、23）。
4. この問題状況に関して、次の二点を指摘。
 - 1) 脳神経宗教学の議論における、原理主義的進化論者と類似の考えの反映。
「自然主義 対 宗教の対立図式」の枠組み
 - 2) 「脳と心」という問題圏は、キリスト教を超えてすべての宗教に関連する（多くの宗教が共有する問題圏）。

宗教意識や宗教経験は「心」「魂」「霊」という場において成立するが、脳神経科学によってテーマ化されているのは、まさにこの心・魂・霊と脳との関係である。

「脳と心」から、諸宗教の比較あるいは宗教間の討論や対話へ。

5. fMRI について、その限界。

実は、脳機能画像は複雑なデータ処理を経て生成される。

- ・ fMRI は、活動自体ではなく神経活動に伴う血流量の変化を測定している。しかし、じかにニューロンが活動するとなぜ血流量が増加するかについては完全な解明がなされているわけではない（ブラックボックス）。
- ・ なにもしていないとき（静止状態）と活動時（活動状態）の二つの条件下での脳活動の比較、つまり、二条件間の引き算の結果が脳機能画像である。
- ・ しかも、測定誤差が存在するために、二条件下で何度も測定を繰り返し、統計処理（平均値と標準偏差を織り込む）を行ったものが、脳機能画像にほかならない。

↓

fMRI による研究によって分かるのは特定の活動と脳領域との統計的相関関係。

6. 現在の脳研究レベルによる議論によって、宗教理解が格段に深まると考えることは、あまりにも過度の期待と言わざるを得ない。「脳と心のかかわりを読み解くには、その道のりはまだまだ長い」（苧坂直行、2012、vii）のが現実である。

宗教研究者としては、脳神経科学の華々しい研究成果を前にして、一喜一憂する必要は、当面ないと思われる。

7. 宗教研究で扱われる宗教現象は、脳科学を含めた自然科学において通常行われているような人為的な実験室内の現象ではなく（fMRI による脳機能画像研究における被験者は、厳密にコントロールされた認知的課題を MRI という拘束度の高い装置内で行う）、個人と集団との様々な現実のダイナミズムにおいて生成するものだ。

（2）単一脳から社会脳へ

8. 社会脳研究の挑戦

「ソーシャルブレインズとは」、「僕たちが社会の中で生き抜くために必須の脳の働き」と説明できます。「わたしたちの脳はけっして孤立していません。常に外部に開かれたオープンなシステムです。」（藤井、2010、4）

脳神経科学が紡ぎ出す研究のネットワークは着実に宗教研究へと近づいている。

9. 社会脳研究の方法論

「神経細胞ネットワーク」と「社会ネットワーク」という二つの階層の区別と関連性。

人間理解：「人々が互いにつながることによってその多層的なネットワークシステムを実現している」（55）。還元主義的な単純化を回避（Spezio）、同時に、身体という境界面において接する質の異なる二つのネットワークの統合。「両者の間に共通するコミュニケーションプロトコルが存在」（56）しなければならない。

↓

「神経細胞から見たボトムアップ的な見方」と、「逆に社会からトップダウン的に見る」見方が可能になる（59）

・「多次元的生体情報記録手法」：「各個体の測定可能な生体情報を可能な限り同時に記録する一方で、環境情報も同時に記録」こと（172）を目指すものであり——「観察者である実験者も、観察対象を含むネットワークに属しており、立場を変えれば、自分自身の脳も研究対象となりうるからです」（192）——、具体的には、たとえば、「てんかん患者の外科的治療の術前探査のため」（174）に使用される「ECoG (Electrocorticogram) という電極を使う方法」が提案される。→ いかなる質のデータをどのようにして獲得するか。

<参考文献>

A. キリスト教と自然科学、進化論

1. リンドバーグ／ナンバーズ編 『神と自然』 みすず書房。
2. 松永俊男 『ダーウィンの時代 科学と宗教』名古屋大学出版会。
3. 芦名定道 『宗教学のエッセンス』北樹出版、『自然神学再考』晃洋書房。
「現代キリスト教思想と宗教批判—合理性の問題を中心に—」
(日本宗教学会『宗教研究』第 82 巻、357-2、2008 年 9 月、227-249 頁)。
4. フランシスコ・J・アヤラ『キリスト教は進化論と共存できるか？ ダーウィンと知的設計』教文館。
5. リチャード・ドーキンス『神は妄想である——宗教との決別』早川書房、2007 年 (2006)。
6. A・E・マクグラス『神は妄想か？ 無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』教文館、2012 年 (2007)。

B. 脳科学とキリスト教

1. 芦名定道「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」(芦名定道・星川啓慈共編『脳科学は宗教を解明できるか？』春秋社、2012 年 8 月)。
2. ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うのか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館、2011 年 (2006)。
3. 理化学研究所・脳科学総合研究センター『脳研究の最前線 上下』講談社ブルーバックス、2007 年。
4. 藤井直敬『つながる脳』NTT 出版、2009 年、『ソーシャルブレインズ入門——〈社会脳〉って何だろう』講談社現代新書、2010 年。
5. 千住淳『社会脳の発達』東京大学出版会、2012 年。
6. 苧坂直行編『社会脳シリーズ』新曜社、2012 年～。
『社会脳科学の展望——脳から社会を見る』
『道徳の神経哲学——神経倫理からみた社会意識の形成』
7. Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk. Toward a Feminist Theology*, SCM Press, 1983. (リユース『性差別と神の語りかけ——フェミニスト神学の試み』新教出版社。)
8. Rosemary Radford Ruether, "Ecofeminism: The Challenge to Theology," in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Harvard University Press, 2000. pp. 97-112.